

行動記録

○8月16日(火) 曇り時々晴れ→雨 (上高地～穂高岳山荘)

——古澤

3:30 起床～4:44 上高地～5:00 岳沢登山口～5:40 風穴～7:25 岳沢小屋～9:20 カモシカの立場～11:42 紀美子平～12:25 前穂高岳山頂～13:10 紀美子平～15:30 奥穂高岳山頂～17:15 穂高岳山荘～21:35 就寝

3:30 起床。前日に 3:30 ならばまだ真っ暗だろうと踏んでこの時間を起床としたのだが、ヘッドライトは必要なものの外はやや明るい。誤算であった。もっと早く起床すべきであったとの後悔は、この後登山道を登るにつれて大きくなっていく。

テント内で 1 年生 2 人に食事の用意を指示しつつ自分の支度を進めるが、いかんせん手際が悪い。こういったことを合宿前にきちんと身につけさせておかねばならなかったのだが、それができなかったのは上級生として責任を感じる。が、そんなことを言っても仕方がないのでひとつひとつ指示を出す。本日の朝食は朝食としておなじみになった雑煮（インスタントみそ汁に煮た餅を入れたもの）。腹もちが良く、水分も取れるので気に入っているのだが味が単調なので今後の工夫が必要だろう。

テントを畳んで出発準備ができたのが 4:44。目標の 1 時間で出発より 15 分ほど遅れてしまった。道は薄明るく、もうヘッドライトは無くても歩ける程度。食料と登攀具で重くなったザックにややうんざりしつつ、長い縦走合宿の一步を踏み出す。

河童橋から岳沢登山口まではアウトドアの遊歩道といった感じのする森の道。道が平行に 2、3 本に分かれていたが恐らくどれを行っても登山道までたどり着けるだろう。

岳沢登山口からは整備された森の登山道。迷うような箇所もなく、ゆるやかに登りながら森林浴を満喫できる。もちろんきつい歩荷がなければだが……。途中、倒木や枝が山のように積み上がった箇所を右手に巻いたが（雪崩の残骸だろうか？）、ここからもうしばらく行くと風穴である。5:40 に風穴に到着。この時点ですでに青木がバテ。特にペースが速いわけでもなかったのに、歩荷が苦手とはいえ少々情けない。ここで、休憩をとり天然クーラーを浴びることとする。ちなみに風穴とは風が吹き出してくる地面（岩盤？）に空いた穴のことで、その中は地表より温度が低いのでこの地域では冷蔵庫のように使ってきたのだという（上高地行きのバスで半分眠りながら聞いたので間違っているかも知れない）。だから、「天然クーラー」である。汗をかいた体にひんやりとした風が心地よかったが、少し風を浴び過ぎて体が冷えてしまった。

風穴の後からはやや傾斜が強くなった石段混じりの道に行く。なにやら宝満山の登山道を彷彿とさせる道である。途中、30 分刻みで小休止を挟みつつ進むと、だんだん木々の天井が開けてくる。それと同時に左手には真っ白な岩礫に埋め尽くされた谷筋が見えてくる。このガレ場をトラバースすればすぐに岳沢小屋である。

岳沢小屋でザックを下ろし、水汲み・トイレ休憩。前穂高を見上げれば、かなりガスっているが、まだまだ登りが続くのがはっきりとわかる。分かっていたことだが、この荷物を持ってさらに急な道を登るのかと思うとやや気落ちした。小屋の方に山頂付近の天気についてうかがうと、ガスってはいるが雨ではないだろうとのこと。

バテてしまった青木の食料を歩荷分けした後、岳沢小屋を出発。ここからの登りがとにかくきつかった。隊を引っ張るはずの私がバテてしまった。理由は2つある。1つは単純に勾配がきついこと。そしてもう1つは私がペース配分を完全に間違えたこと。空荷のようなスピードで登ろうとしてしまったのだ。登山道は開けた岩場(クサリ・ハシゴあり)と森とを交互に抜ける長い登りである。そこをなぜそんなスピードで行こうとしたのか、冷静に考えればまったく理解不能だが、「時間内に安全に行程を終える」という強迫にも似た焦りがあったのだと思う。それが逆に隊の首を絞める形となってしまった。20分ほど登っては休憩し、軽装のツアー客に抜かされ、下山するパーティに歩荷を同情され、また20分ほど這うように登る……というなんとも情けない登りであった。登山道自体はクサリ・ハシゴはあるもののさして危険というほどでなかったのが救いだ。また、岳沢小屋を出発した後から断続的に曇り、ときに小雨が降っては止む、というはっきりしない天候であったことも記しておく。

何度目かのクサリ場をほうぼうの体で越えたとき、ようやく紀美子平に到着した。時刻は11:42である。紀美子平は「平」というよりは尾根をやや平らに伸ばした「肩」のような場所だった(穂高が岩っぽい山だから当然なのだが)。まわりはガスが立ち込めており展望が悪い。晴れていれば奥穂高、吊尾根、前穂高、岳沢が一望できる素晴らしい場所なのだろうが……。ともあれザックを下ろして休憩である。目下の問題は、遅くならないうちに穂高岳山荘まで辿り着けるのか、である。それを思うと前穂高ピストンを諦めるか、と考えてしまうのだが、中山の強い希望により前穂高ピストンは決行。青木にも前穂高を踏んで欲しかったが、この後の吊尾根でもバテバテでは困るので、荷物と一緒に青木もデポして中山と2人、前穂高岳山頂へ向かった。

空荷のなんと素晴らしいことか！先ほどまで上げては上がらなかった身体がスイスイと上がる。あまりの身体の軽さに、「前穂高をピストンし、そのまま空荷で山荘まで行けたらどんなに楽だろうか……」と、悪魔的に魅力的な妄想にとらわれかけたが、すぐに自分を現実に戻す。そんな軟弱なことでは、果たしてなんの達成感が得られようか、いやしかし……。こんな葛藤を繰り返すうちに何の問題もなく山頂へ到着する。山頂は相変わらずのガスで展望はなし。後ろから登ってきた若い男性と互いに記念撮影をし、早々に引き返す。せつかくの前穂高岳で展望がなかったのはただただ残念であったが、紀美子平へ戻る途中にガスが一時切れ展望が開けた。見えたのは奥穂高へと延びる吊尾根。奥穂高のピークは雲で煙り、その姿を見せない。これからこの稜線を辿り、あの雲の中のピークへ行くのかと思うと、期待と緊張でへその下が震えるようだった。

青木と合流し、吊尾根へ向かう。その名のごとく、前穂高と奥穂高の間に吊るされるよ

うに延びた、鋭くガレた尾根である。ガレ場、岩稜歩きの経験が乏しい1年生を連れていくなると全く気が抜けない。1年生の耳にタコができるほど「落石をするな」「気を抜くな」と呼びかけながら、慎重に進む。小ピークを巻く時は大概足場が狭くなるので確実に身体を支持しながら進み、その後のコルではルートを誤らぬよう気を払う。何度そのようなことを繰り返したのだろうか、道はガスって先は見えず、降り始めた小雨と風にパーティは気力・体力ともに削られていた。いつ奥穂高へ辿り着くのか……と、疲れて休憩していたとき、ガスがにわかに晴れ奥穂高がその姿を現した。ルートを読めていない証拠でもあるのだが、意外なほど近くまで来ていたことに俄然元気が出てきたパーティ。最後のクサリ場を越え、南稜の頭を通り、奥穂高岳山頂である。

あまりに濃いガスと風雨のため山頂での記念撮影は諦め、休憩の後すぐ出発することにする。ガスで視界の悪い中、なるべく隊員同士離れないよう、慎重に尾根を下る（このときコンパスを見なかった。これは本当にやってはいけないミスだった）。10分ほど下ると、今度は登り……稜線は切り立っている。まさかと思ってコンパスを取り出すと、稜線は南西へと延びていた——なんという間抜けだ、なぜ視界の悪い山頂の分岐でコンパスを見なかったのだろう。パーティは西穂高への痩せ尾根に入ってしまった。1年生に状況を説明し、決して焦らないよう自分に言い聞かせながら奥穂高岳山頂へと引き返す。

どうにか、2度目の奥穂高への到着。今度はきちんとコンパスを見てルートを見定め、ペンキマークを探しながら北進する。ガレた尾根を下っていくと、次第に勾配が急になりハシゴとクサリが設置された岩場に着いた。雨に濡れたハシゴで足など滑らせぬよう慎重に1人ずつ降りて、さらにガレ場を下ると、ようやく穂高岳山荘に到着した。17:15の到着、計画していた行動時間を大幅に過ぎての行動終了だった。

山荘に入りテント泊の手続きを済ませ、ヘリポート近くにテントを広げてようやく一段落である。身体を温めるためカフェオレで一服したのち、肉じゃがの調理。まあまあの出来だったと思うが、私は玉ねぎにあたったのか食後、頭が痛かった。

トイレに立ったときに小屋の天気予報を見ると、2~3日は雨か霧が続きそうである。少なくとも明日は沈殿だろう。そう考えながらふと穂高の方を見ると、前穂から延びる北尾根と奥穂が月明かりに照らされ、味わいのある陰影が浮かび上がっていた。いいものを見たと思えば1年生に自慢し、シュラフの中で眠りに落ちた。

○8月17日(水) 曇りのち雨 (穂高岳山荘テン場で沈殿)

——青木

7:00 起床~8:00 朝食~8:20 中山診察~12:40 昼食~17:15 夕食~19:00
就寝

前日の上高地~穂高岳山荘の行程に10時間以上も費やしたことで、隊の疲労もたまって

いることや、天候が悪いことを考え、この日は穂高岳山荘テン場（以下穂高岳山荘）で沈殿となった。穂高岳山荘ではガスで辺りは白く、周囲の明るさでは時間の感覚がつかめない状態であった。風は相変わらず強かったが、雨は朝にはあまり降っていなかった。しかし、昼に近づくと強めに降り出してきた。

穂高岳山荘のトイレは山の上にある割には清潔感のある場所で、トイレには全てにトイレットペーパーが備え付けてあり、においも臭くなく、洗面台もきれいで水もしっかり出ている。（山荘で飲料水を 10150 円で買わなければならなかったのだが、おそらくトイレの洗面台から出ている水と同様のものではなかったため、商売的にどうかとは思ったが。）今回の合宿で使わせてもらったトイレの中では一番良いトイレだった。

起床直後、中山は頭痛、青木は鼻水が大量にでるといった症状がみられた。青木は蓄膿症で日頃から鼻水がでる体質であったため、風邪ではないと判断しペーパーを鼻に詰めておいた。しかし、中山は体温計で測ったところ 37 度を超えていたため、大事に備え、穂高岳山荘の診療所でみてもらうことにした。診断の結果、血中の酸素濃度が基準値を下回っており（通常 95% 以上のところ中山は 85% 程度だった）、高山病とまではいかないまでもそれに似たような症状がみられたようだ。前日に一日で標高差 1500m を登りきったのだから、当然と言えば当然だ。都合良く今日は沈殿が決定していたので、中山は十分に睡眠をとって明日に備えることにした。中山の体調を気遣い古澤先輩が明治の板チョコを差し入れた。

昼食では中山は英気をつけるため、山荘でカレーを食した。青木と古澤は前日の登山中に会話を交わした元山岳会の方からももらった食料をテント内でたいたげた。

晩ご飯はレトルトカレー。中山は昼もカレーだったが。風でテントが音をたてている中で就寝。

○8月18日(木) 曇りのち雨 (穂高岳山荘～槍沢キャンプ場)

——青木

3:30 起床～5:00 穂高岳山荘発～6:35 潤沢小屋着～8:11 本谷橋着～9:15 横尾山荘着～11:10 槍沢ロッジ着～12:12 槍沢キャンプ場着

3:30 起床

天気は相変わらず悪く、かなりガスっている。

5:00 穂高岳山荘発

かなり下りが急で、岩場なので、雨の日などは滑落に注意したほうがよい。道の幅も狭く、慎重に下りなければならない。ガスもあったためかなり危険だった。下りの最中に登山道の傍らに雪渓が多くみられた。最初の雪渓がみられたところで、高校の山岳部と遭遇。かなりの大所帯で何十人も高校生がいた。その団体に道を譲ってもらったので、先に進む

ことに。しかし、中山が道を譲ってもらい、早く通り過ぎようとしたために、道の外に滑り落ちてしまった。力を入れて、足を踏み入れると滑りそうな小石がたくさんあるガレ場だったので、ゆっくり慎重にすすむことが大切だった。中山はかなり滑り落ちはしたが、急な場所でなかったことや本人も体に異常はなかったので、大事には至らず。

涸沢小屋に近づくと色とりどりのテントが視界に入る。

6:35 涸沢小屋着

涸沢小屋は飲料水（無料）あり、トイレあり。

6:45 涸沢小屋発

沢沿いの登山道下っていく。木々も生い茂っており、川の近くとあって、比較的涼しい。穂高周辺と違って、岩にもこけが張り付いている。登山客も多く見られる。

8:11 本谷橋着

本谷橋が架かっている川の岩場は多くの登山客の休憩場となっている。この日も登山客が多数休憩していた。しかし、その一方でゴミが捨ててあるのも眼に入った。人が多く集まる場所ではしょうがないのかもしれないが……

8:16 本谷橋発

ゆったりと下る。大きな橋を渡り横尾山荘に至る。

9:15 横尾山荘着

横尾山荘は飲料水あり、トイレあり。老若男女多くの登山客がおり、運が良ければ、猿が見られるようだ。

9:40 横尾山荘発

ゆったりと上る。道の両側には木々が生い茂っており、沢も見える。途中一の俣、二の俣など川の合流地点がみられた。雲の切れ間から久しぶりの日光がさした。青木がバテ気味だった。

11:10 槍沢ロッジ着

槍沢ロッジでテシ場の使用料を払い、キャンプ場に向かう。水場あり、トイレあり。

11:45 槍沢ロッジ発

上り。地面は岩場で、岩は赤みがかっている。

12:12 槍沢キャンプ場着

槍沢キャンプ場はトイレあり。ペーパーはなし。水場あり。槍ヶ岳の方向を見ると、ガッってはいたものの横尾尾根が望める。ここは昔小屋があったが、雪崩によってなくなったらしい。ここにくるまでの途中にそのなごりがみられる案内もみられた。

今回の合宿では出発時に雨のために出発時間が遅れることが多々あったが、18日はスムーズにいった。

今日の行程は穂高岳山荘～涸沢小屋を除けば、緩やかな上りと下りしかなかった。そのため目的地にも早めに着くことができた。18日のルートは川沿いの道で、標高も低かったこともあり、寒くも暑くもなく非常に快適だった。

キャンプに着いた後は、たまたま夕食をつくる時間に雨がやんでいたの、調理はテントの外で行った。調理と言ってもレトルトのパスタソースと麺をゆでただけなのだが。夕食後雨が降り出し、テントが浸水しだしてきた。そのため地面に水がたまりにくい場所へ雨の中移動することになった。テントを設営するときは雨水がたまりにくい場所を選ぶことも大切だとわかった。

○8月19日(金) 雨→つかの間の晴れ→曇り時々雨 (槍沢キャンプ場～槍ヶ岳山荘キャンプ場)

——中山

4:00 起床～5:10 槍沢キャンプ場出発～5:41 大曲着～6:14 中野沢～8:30 殺生ヒュッテ(20分程度休憩)～9:40 槍ヶ岳山荘着～12:18 槍ヶ岳山頂～20:00 就寝

それまで通りテント内部の水をタオルでふき取ってからテントをたたむ。槍沢キャンプ場から槍ヶ岳に伸びる道は東鎌尾根と横尾尾根の間に消えている。今日一日の道のりの長さを思い知らされる。最初は緩やかな傾斜を、槍ヶ岳を源流とする槍沢を左に見ながら進む。早朝は、川の冷たさから、川の上のみ霧がかかって幻想的な風景となっていた。そののち、それまでの森の中を抜けるような道から一転、岩だらけのゴツゴツとした道になる。ここからは、かなり上まで道が伸びているのがわかるため精神的にしんどい。この日は、霧がかかっていたので槍ヶ岳を見ながら登ることはできなかったが、晴れていれば槍ヶ岳がきれいに見えることだろう。岩だらけの道を登っていくと途中、坊主岩という岩窟があり、昔、ある僧がこの岩窟の中で53日間読経したというところらしい。殺生ヒュッテで休憩するが、それまでの雨で体が冷え切っており、そこから出たくなる。そのまま雨と闘いながら登っていくと槍ヶ岳山荘着。テントの中で暖をとっていると、それまで雨であった天气が少しずつ回復、晴れ間がでて、霧が晴れ、槍ヶ岳の山頂がきれいに見えた。なんたる僥倖。テントからでも山頂にいる人が見え、賑わっているのがわかった。その後、槍ヶ岳ピストンを開始。山頂からは硫黄尾根、赤岳がはっきり見え美しい。今回の合宿で初めての、山頂からの眺望であった。しかし、テント帰着後、再び天候が悪化し曇り空、次いで霧がでてくる。そして三人の顔も曇ってくる。

○8月20日(土) 曇り→雨 (槍ヶ岳山荘キャンプ場～黒部五郎小舎)

——中山

4:00 起床～6:00 出発～6:40 千丈乗越～(7:40～7:50 休憩)～(8:30～8:40 休憩)～(9:15～9:25 休憩)～9:30 縦沢岳～9:55 双六小屋着～10:15 双六小屋出発～12:30 三俣蓮華岳山頂～13:45 黒部五郎小舎～22:00 就寝

5:00 出発の予定であったが、夜からの雨により様子を見ることに。雨がエスペースの中に入り、テント内が水浸しになる。古澤先輩が夜中一時間ごとに起きて入口に溜まった水をふき取らなければならないほどであった。結局 6:00 出発。8/19 に引き続き、移動中も着ることのできる防寒着と替えの服の必要性を感じた。この日も霧が濃く、視界が悪い。ハイマツに覆われた岩稜を進む。移動中、ライチョウを2羽発見。実にめずらしい鳥だが、丸くて少しおいしそうに見えてしまった。また、硫黄乗越のあたりでは硫黄の匂いがした。登りだけ、もしくは下りだけの連続はなく、軽いアップダウンを繰り返しながら淡々と距離を稼いでいく。三俣蓮華岳への登りは、岩場の道であるが歩きにくいということはない。しかし、山頂まではかなり距離があり息が上がる。もう山頂かと思うとまだ道が続く、といういやらしい登山道に苦しめられる。三俣蓮華岳から黒部五郎小舎は足場が狭くなる場所もある。それまでの疲れや足場が濡れているということから滑るのではないかと怖くなる。慎重に進む。最初の方は岩が多いが、後半は木々をくぐりながら進む。今までの雨で後半の道は川のように水が流れていた。沢を下っているかのような錯覚を覚える。泥や濡れた石で滑らないように気をつけて進む。途中、青木が足を滑らせ頭から転落。あわや、という場面であったが、大きなけがはなし。さらに気が引き締まる。今日の夜、長く続く悪天候、テント内への浸水、防寒着やシュラフが濡れ体温低下を防げないことなどの理由から、エスケープ決定。少しでも荷物を減らそうと、中山と古澤先輩で夜食に棒ラーメンを食べる。

○8月21日(日) 雨 (黒部五郎小舎～新穂高温泉)

——古澤

4:00 起床～5:54 黒部五郎小舎～7:40 三俣蓮華岳～9:41 双六小屋～11:01 弓折岳～11:38 鏡平山荘～13:15 秩父沢～14:17 わさび平小屋～15:40 車道ゲート(ニューホタカ)

不本意ながら撤退の日である。撤退の理由としては、

- ① 服・テント・シュラフ等の装備が濡れている。
- ② 数日間は雨が続く見通しであり、装備を乾かすことができない。
- ③ 薬師峠 CS 以後の宿泊地で体調を崩した場合、身動きが取れなくなる。(よいエスケープルートがない。)
- ④ 携帯電話など外部との連絡手段が機能するとは限らない。

が挙げられる。つまり、最終下山日を守ることができずに捜索が開始されてしまうことを恐れ、早期撤退を決めたわけだ。軟弱な判断だったかもしれないが、遭難沙汰を起こすわけにはいかない。今回は、経験の少ない1年生を私1人で連れて縦走を続けるには不安要素が多かった。

4:00 起床。雨は相変わらずテントを打ち続けている。濡れた服装でシュラフにくるまり、浸水したテントで眠ったため、シュラフは内から外から濡れていた。予想通りの悪条件のため息をつきつつ、支度を済ませる。

雨の様子を見て 5:20 ごろから撤収作業。毎日雨だったので手慣れてきてはいるが、自分も含めもっとテキパキとできる気はする。小舎の水場で水を汲んだら、この雨で沢の水も濁っているのか、やや黄ばんだ水が出てきた（おそらく砂が混じっている）。これを飲むほかにないので、双六小屋までの我慢と思い、2L 弱汲む。

5:54 出発。小舎からすぐの登りは昨日よりもさらに増水しているが、登れないほどではない。苔などに気をつけて登っていく。分岐ではすべて急坂コースをぐいぐいに行くつもりであったが、途中で私の腰が砕けそうに痛んだため、最後の分岐で展望コースを選択。ぬかるんだ道で、悪いは悪かったのだがさほどでもない。こんなことなら昨日もこちらを選んでいれば青木が転ぶこともなかったのでは……と申し訳ない気持ちになった。

森の中の登りを終え、開けたハイマツの道もサクサクと進む。昨日駆けるように下ったのが登りに変わっただけで、さして述べることもない。バンド状の大きな残雪を左手に斜面を登れば三俣蓮華岳である。

8:00 ごろ、三俣～双六の巻道コースに入ってすぐのザレた下りで中山・青木が相次いで転倒。2人ともけがはなし。青木の転倒は中山の転倒のすぐ後だった。中山の転倒後に転倒せぬよう足の置き場には注意するよう呼び掛けていたのにもかかわらず青木が転倒してしまったのは、疲労で集中力が散漫になっている証拠だろう。私自身も疲労のためかきつい言葉で注意してしまった。転倒はしてはいけないことだが、1年生には少しかわいそうなことをしてしまったかもしれない。

巻道ルートでは雨による増水で、昨日通った時には何でもなかったような小さい沢が白い飛沫をあげながら流れていた。足を取られぬよう、踏み場に注意して渡ることが 2, 3 度。谷筋の登りも増水してあたかもそこが元から沢であったかのようにふるまっている。写真でも撮りたい風景だったが、いまはとにかく慎重に歩みを進めることだけを考える。また、休憩時に風雨をさえぎるようなものがほとんどないのにも参った。おかげで休憩のたびに身体が冷えてしまった。（かと言って休憩が短すぎては休憩にならない。難しいところだ。）地味にも長く感じる巻道ルートをじりじりとしながら行くと、ようやく双六小屋への下り。ほっと息をつく一方、こういう時こそ気を引き締めなければ、と隊員一同発奮する。

双六小屋で水汲みや情報収集を終え、弓折岳へと向かう。双六小屋の水に濁りはなかった。小屋の方によれば、秩父沢の増水も特に問題はないとのこと。（もちろん鏡平でも情報収集はするが。）相変わらずの霧雨に吹かれながら、2年前も通ったエスケープルートに行く。ここではまだ雨による影響はほとんどない。せいぜい木道の横が水たまりになっていたことくらいだろうか。整備され階段状になった稜線上の軽いアップダウンを幾度か繰り返すと、花見平、そこからもう少しで弓折乗越（弓折岳分岐）である。

この分岐からは途中に別の登山道もあるが、ほぼ一本道で新穂高温泉まで行ける。分岐

からすぐのくねくねとした石段と土の下りでは下山するまでのことを考えていたが、次第にこの撤退を報告することを考え始めると気分が落ち込んできた。「さして豪雨でもない雨に負けて撤退」。端的に言って実力不足でしかないので、関係各位に報告するのは気が重かった。が、隊の安全には代えられないので、仕方がない。

11:38 鏡平小屋着。小屋の入口はこれから宿泊するであろう人達で賑わっていた。小屋の方に秩父沢の増水について尋ねると、特に問題ないとのこと。安全が確認できてほっとする。ここからは石段になった道が続く。雨による増水で道が水流に沈みかけているところもあるので注意しながら進む。この登山道の2年前に見たものとは異なる姿を見ることができて少し嬉しかったが、ずっと続く下りに、こちらは靴も服もびしょ濡れである。単純作業をこなすような心持ちでひたすら下り続けた。

14:17 わさび平小屋到着。ベンチに腰掛けて今回の撤退の原因を考えてみた。係の反省でも述べようと思うが、「準備不足」に尽きるのではないだろうか。体力不足、メンバーシップ・協力体制の不備、生活技術の不足……計画に対して実力が伴っていなかったのではないだろうか。

かなり標高が下がったせいか、しとしとと降り続けていた雨もほとんど止んでいる。歩くたびに靴下から水がしみ出すような足を引きずって、新穂高温泉を目指す。途中、救急車とすれ違う。小屋のあたりで急病人でも出たのだろうか。15:40 ごろ、車道ゲート(ニューホタカ)到着。いくつかのタクシー会社に電話をし、一番早く来られるという宝タクシーにお願いする。16:30 ごろ、タクシーが到着。短かった縦走が幕を閉じた。

係の反省

○SL——古澤

今回、縦走合宿で SL（竹下が不在のため実質上の CL）を経験してみて、自分の実力不足を痛感した。

まずなにより、一步間違えれば事故、ということが何度もあったことを後悔している。穂高岳山荘～潤沢山荘での中山の滑落、黒部五郎小舎直前の青木の転倒……1年生の歩行技術を勘案しても、どれも私の注意喚起と行動のペースが適切であれば防げただろう。私の落ち度で1年生を危険にさらしてしまったのは本当に申し訳なく思う。

また、予想外の状況で冷静な判断を下すことの難しさも実感した。今回の縦走中では長く続く悪天候に悩まされたが、悪天候や隊員の疲労をみて、行くか退くかの判断を下す場面が多々あった。計画を完遂したい気持ちと隊の安全を取りたい気持ちがせめぎあい、いざ別ルートを取ろうという時にも、そのルートでいいのかと確信が持てない。知識・経験の不足を痛感し、焦りが出てきて1年生にかける言葉もきつくなってしまう。リーダーとして上級生として情けない姿である。

自分自身の余裕のなさを差し引いても、私は「教える」ということが苦手なのではないかと思うことが多々あった。たとえば、食事の指示1つとっても、相手が合宿経験の少ない1年生で、何を知っていて何を知らないのか、その上でどのように言えばもっとも簡潔に指示したいことが伝わるのか、という一連の思考のプロセスを自然に行えたかということ、はなはだ疑問だ。（私はこれができるのがリーダーの資質の1つだと思う。）

いくら私が自分のリーダーの資質に絶望しようと、私が上級生で、前途ある下級生を持っていることに変わりはない。これからは経験を積み、自分の技術を磨き、下級生を育てるということを今まで以上に強く意識して活動に取り組むほかない。

○装備係——中山

今回の合宿での最も大きい反省点は、雨による体温低下を軽視していたことである。歩いているときは大丈夫でも、休憩中は体温が下がり、体力が奪われてしまう。雨の中を歩く際も防寒の必要があると改めて認識、防寒着の中でも移動中も着ることのできるような防寒着が必要であると感じた。テントを立てた後も、今回のように雨が続き、着干しではどうにもならない場合、濡れたままでは体調を崩すので、替えの服の必要性をも感じた。

今回の合宿では行えなかったが、雪上訓練で使うピッケルの使い方の事前調査が不十分だった。もし、雪上訓練をしていたらモタモタしてしまい、足を引っ張っていたであろう。装備係としては失格である。

装備係としてはまだまだ知識不足である。シュラフの防水知識、テントの浸水防止法など。装備係が装備について知らない、という情けないことがないように勉強していきたい。

○食料係——古澤

食料係としての反省は2つある。準備段階での割り振り、献立の内容についてである。

まず、準備段階での割り振りについてだが、問題点は私1人が仕事を抱え込んでしまったことである。それは具体的な献立の決定から買い出し、パッキングまで1人でやろうとしてしまったということだ。(エッセンや乾麺については直前の準備で分担して行えたが。)仕事を割り振ることも考えたが、もう1人の食料係である1年生の中山に負担にならず、かつ仕事を覚えてもらえるような割り振り方を——と考えてしまうと、(計画が直前まで確定しなかったこともあってバタバタとしていたので)今回は1人でやった方が楽だろうか、とタカをくくってしまった。結果、生野菜等直前に私が買い出しをしたもののパッキングが間に合わず、合宿の福岡出発に遅刻するという大失態を犯してしまった。

今後の対策としては、とにかく自分を過信しないで手間がかかっても仕事を分担することである。たとえば今回であれば、中山に献立を伝え、食料の歩荷分けをどのようにするか決めてもらう、だとか、直前の準備会で買い切れなかった食材に関しては(その場で内容を考えてでも)合宿参加者に分担して買い出しをしてもらう、だとかギリギリまで仕事を分担しつつ1年生に仕事を覚えてもらう手立てはあったはずである。だが、何にしても早め早めの準備が1番大切なのは言うまでもない。

次に、献立の内容についてだが、1日の行程を終えた後に落ち付いて入眠するためにも、もっと身体が温まる献立を考えるべきだった。たとえば、即席チャーハンをご飯を炊いてふりかけを混ぜるだけでよく、手間が掛からず味も悪くない。しかし、汁物がないために身体の保温を考えると不備があったように思う。もしこれに即席中華スープでも付け加えれば、歩荷も大して重くならず身体を温めるという点をクリアできたのではないか。

また、今回取り入れてみた肉じゃがは、不味くは無いが美味しくもないという中途半端な献立であった。これは味の改善を試みるか、献立の廃止を考えるべきだろう。また、画一的な朝食の献立も、現役山岳部が依然として抱える問題点である。水分・カロリーを取れて、調理時間が短く、安価で腹もちのよい献立(文字にして見るといかにも万能の献立で存在しないのかと思えてくる……)はないものかと思案しているが、なかなか思い浮かばないのが現状だ。

いま、機会があれば試してみたい食材はクスクスである。これは北アフリカで食べられている直径1mm程度のパスタらしく、お湯(水でも可能とも聞く)で20分ほどでもどすことができるそうだ。味はパスタのようにトマトソースや鶏肉などに合うらしく、またレーズン入りの味付き(?)クスクスなども売られているらしい。味に問題がなければかなり便利な食材のようだが、難点は輸入食材を扱っている店でなければ購入できない点だろうか。

○医療係——古澤（代理）

医療係の大橋が合宿に参加できなかったため、代わりに古澤が実際に合宿に参加して初めての反省を述べる。

医療箱の内容についてだが、毎日雨で体が冷えたという状況に対して携帯カイロの数が足りないように感じた。しかし、今回は何日もの間雨が降り続くという、登山をするにはある種特殊な状況であったので、カイロの不足は共同装備よりも個人装備で補うべきだろう。また、医療箱に収める薬の種類に限界があるのも、今回実感した。というのは、中山が広島駅で胃痛を起こしたからだ。胃痛の原因は不明だが、便意は無い。医療箱の中には下痢止めと便秘解消薬しかない。胃痛は歩くのが辛いほどで、薬局ももう店仕舞いしている時間だったため、ただ痛みが治まるのを待つしかなかったのだが、医療箱に胃痛用の薬を常備しておくべきだったであろうか？ 私はそうは思わない。個別の体調不良にすべて対応するように準備をしていたのでは、持って行く薬の量が膨大になってしまう。もし仮に中山が日常的に胃痛を起こすのであれば、当人が個人装備で薬を持ち歩けばよい。係の仕事として肝要なのは、さまざまな状況に対応しうる装備を整えることだろう。ちなみに、今回は対処として温かいお茶を与え、痛みが治まってから漫画喫茶のやや広いブースで一泊させた。（当初考えていた駅ビヴァークは中止した。）

○交通係——古澤、青木

今回の合宿での反省点は、キャンセルが現地ではできないバスを交通計画に組み込んでしまったことである。もしかしたら、今回の合宿で雨に降られ続けた原因はここにあるかもしれない。

問題の行程は大阪～富山間の JR バス（ドリーム 1 号）である。今回、事前にこれを電話で予約し、コンビニでチケットを受け取っていたのだが、このチケットのキャンセル・乗車日変更等は、大阪か富山で乗車時間以前にしかできないと予約時に伝えられていた。予約したときには、今回のように合宿直前に参加人数が変動したり合宿計画が大きく変更されるとは思っていなかったもので、問題ないだろうと思っていた。しかし、実際には入山場所が変更されるという事態になっている。こうなると、入山までの往路でバスをキャンセルしていくしかないため、たとえ山がどんな天気であってもバスのキャンセルが間に合う日に福岡を出発せざるをえない——このような状況であったために、今回の合宿で雨に降られる北アルプスに突入してしまったのではないかと考えている。

今後このようなことを防ぐには、キャンセルや旅程変更の可能性まで視野に入れて交通会社との契約内容（？）に目を通すべきだろう。

今回、1年生の青木は復路の交通計画に関してよく働いてくれた。青春 18 きっぷの乗り換えについて調べるため、駅に発着ホームの問い合わせまでしてくれている。この場を借りて、お礼を言いたい。ご苦労様です、本当にありがとう。（古澤）

行きはほぼ計画通りに計画がすすみ、予定通りに入山することができた。しかし、帰りは下山した時間が遅かったため、当初の計画通りにことをすすめることは不可能だった。松本駅のみどりの窓口で18切符を使い、帰る方法を調べてもらったものの、別途指定席料金がかかる行程しか調べられず困ってしまった。しかし、携帯で調べてみると別途料金を払わずに帰れる方法がわかった。公式の情報よりもやっぱり最後に頼れるのはネットの情報なのかと感じた。

ビバークの面ではいくつか課題が見つかった。治安の問題以前に松本は意外と夏でも外は寒かったので、ネットカフェやファミレス、マックの位置情報は把握しておくべきだとわかった。今回松本で一夜を過ごすにあたり、ファミレスなどを探したが、24時間営業の箸が掃除のため入店できないなどのハプニングもあった。おかげでかなり夜の松本をうろつくはめになった。前もって5件は24時間営業の店は調べておいたほうがいだろう。

(青木)

○記録係——青木

記録係の仕事は完璧にはこなせなかった。自分の体力のなさから、休憩時間は記録に時間を割くことができず、体力の回復にすべてをつかってしまっていることも多々あった。また、ペンを油性のものではなく水性のものを持ってきてしまったものも失敗だった。雨ということもあり、インクがにじんでしまい後に解読不能となりかけた記録もあった。雨でメモ帳を取り出すのがためらわれた瞬間もあった。次回からは、余裕を持って行程をこなせる体力と、防水性を持ったメモとペンが必要だ。

個人の感想

古澤 茂 (3年)

楽しみにしていた合宿が、撤退という形で終わってしまったのは非常に残念だった。このことについての反省は行動記録や係の反省を見ていただきたい。ともあれ、天気恵まれず、荷物が重い縦走とはこんなにもつらいものだったのか、というのが合宿を終えての一言目である。荷物は（持った感触での判断だが）30kgを超し、展望はガスが充満し開けない……私が1年生に体験してもらいたかった縦走とは、こんなものではない！と声を大にして言いたかった。いや、実際口に出して合宿中にも言っていた。

が、悪いことばかりでもなかった。涸沢から見た、霧の漂う横尾谷の風景は神秘的で雄大であった。一瞬の晴れ間が見えた槍ヶ岳山頂では、雲の間に見え隠れする北鎌尾根に思いをはせた。槍ヶ岳の雨の冷たさ・風の冷たさを知ることでもできた。翻って、太陽の暖かさ・ありがたさが身に沁みて理解できた。こういったことは写真や文章では伝えることのできない、「私だけの実感」である。このようなものを感じ取れたのだから、完遂することのできなかつた今回の合宿にも意義はあつたはずだ。……もう1度やれと言われたらご遠慮願いたいところだが。

短い縦走であったが、特に前半の行程のアップダウンは激しく厳しいものだった（標高差が初日・3日目に約1600m、4日目に約1200m）。厳しい状況に直面することで、私自身を含め、おのおの課題が見つかった。今後はその課題の克服を目指し、秋冬の目標に向かっていきたい。

青木 陸太 (1年)

今回の合宿で一番痛感したのは自分の体力のなさだ。合宿前の若杉の歩荷縦走などで明らかに自分が周りとは比べ、荷物を担げず、移動速度が遅いことがわかっていた。その後、体力作りのために走り込みなどを行ったが、案の定、最初の行程から隊のスピードについていけず、最初の岳沢小屋で食料とガス缶を歩荷分けすることになってしまった。それ以降も自分の荷物が一番軽いにも関わらず、間をあけてしまうことが多々あった。自分のことだけで精一杯で、周りを見ることができず、常に足下をみてどうにかついでいこうと必死だった。来年は自分が一年生の荷物を持つことになる可能性もあるかもしれない。ましてや自分の荷物なんて持ってもらえない立場になるので、がんばってより多くの荷物を歩荷できるようになり、余裕をもって歩けるようにならなければならない。今回の合宿では先輩の指示を待ってしまったり、自分で考えずに先輩に教えてもらったりと非常に頼りなかつたので、その辺も自主性を心がけて行動しなければならないとも感じた。

また、思い知つたのは雨の恐ろしさだ。身体が濡れてしまい、休憩で体を休めても動かないことですぐに体が冷えてしまい、休憩もままならない状態だった。合宿前に雨になつ

たときの山というものを経験していなかったもので、認識が甘かったことを実感した。雨の対策としては濡れないことが大前提なのだが、カイロや防寒着、着替え等を十分に持っていくことが大切だとわかった。今回の合宿では下山用着替えしかもっていなかったもので、濡れた服を着替えることができず、寝るときも体が冷えてかなり困らされた。カイロも医療箱のもの以外にも各自で持っていくことが大切だろう。

反省点もいろいろあったが、合宿ではいいこともあった。それは槍ヶ岳の頂上に登ったときのことだ。ずっと辺りが真っ白の登山道を天候が悪い中歩いてきたので、あのときは感動したものだ。あの景色を見に来年はもっとたくましくなって、北アルプスに向かいたいと思う。

中山 湧貴 (1年)

今回の合宿は始終雨に悩まされた合宿であった。霧の影響で景色もろくに見ることができないような状況だったが、しかし、この経験からかなり多くの物を得たように思える。まず、山をなめていた自分に気付かされた。山での防寒対策の甘さや体力の認識の甘さを引き起こした自分の油断に気付くことができた。また、朝起きてから朝食を作り、テントをたたんで出発するまでをできるだけはやくすることの訓練もできた。登攀技術や、登山時の体力はもちろん、このような作業で先輩の足を引っ張らないようにしていこうと思う。

やはり、楽しみにしていた分、登山時の景色を見ることができなかったのはかなり残念だった。しかし、山は逃げない。また、別の機会に、今度は晴れることを願って、再度、奥穂高岳や劔岳に挑戦してみたいと思う。